

特集を組むにあたって

専修大学社会知性開発研究センター／東アジア世界史研究センターは、平成19年度文部科学省オープン・リサーチ・センター（ORC）整備事業「古代東アジア世界史と留学生」が採択されたのを受け2007年に発足した。

爾来、私たちは、この事業が何を実施してきたかを記録する媒体として、年報『東アジア世界史研究センター年報』の刊行を義務付け、これまでに5冊の年報を公刊してきた。本号は、ORC事業の最終年度の5年目になることから、東アジア世界史研究センターとして出す最後の年報となる。

本号には、2011年7月9日（土）に行われた公開講座「墓制からみた東アジアの交流」の全報告と11月19日（土）・20日（日）に行われた公開講座「古代東アジアの国際情勢と人流」の全報告を、報告者各位の協力を得て、収録している。

また、東アジア世界史研究の研究拠点のひとつとして、研究交流の促進もはかってきたことから必要に応じて、原稿の寄稿を願い、本誌に反映させてきたが、本号にも葛継勇氏の論文『『衞軍墓誌』についての覚書』と2008年秋の国際シンポジウムで報告いただいた葉國良氏の御著書『宋代金石學研究』の書評を掲載することができた。

加えて、「5年間の研究活動を振り返って」を収録し、ORC整備事業の「古代東アジア世界史と留学生」が、課題としてきたものを再確認し、この5年間に取り組んできた経緯をたどることによって、その成果を確かめ、残した課題を明示した。

5年間にわたって計6冊の年報を刊行し、広く学界に寄与し得たのは、ひとえにシンポジウムや公開講座での報告並びに報告の原稿化の協力を惜しなかった報告者各位、寄稿いただいた各位や翻訳を許可し年報への掲載をお許しいただいた各位等々の協力のお陰である。改めて、御礼申し上げます。

なお、この年報は、専修大学学術機関リポジトリに登録されたことにより、収録論文等のダウンロードが可能となっており、その活用によって、掲載論文の利用の便は保証されている。

また、5年間を通じて、最重要課題として位置付けてきたデータベース「古代東アジア世界史年表」が、なお、細部の点検を必要とする部分を残しているが、期間内に完成し、ウェブ上での利用に供することができるようになった。

これらを積極的に活用することで、日本・東アジア（ユーラシア）の国際関係史が、さらに盛況となることを期待したい。